

ティータム

明治・3人の蔵前OB

—最初の民間平炉・日本鑄鋼所の創設—

名譽教授 山崎 升

明治32年(1899)ベルギー国アントワープ港を解纜した日本郵船常陸丸の甲板に奇妙な日本人が2名乗っていた。いくつかの大型機械類を積み込んだ荷主には無償で船室が提供されるのが一般であるが、彼等はこれを断り低料金のデッキパッセンジャー(甲板で寝起きする)にまじり約60日の日本への航海をはじめた。

この2名は蔵前職工学校(当時職工は技師の意)の第2回(明20, 1887)及び第5回機械工芸部(機械科)を卒業した山崎久太郎と羽室庸之助で、選ばれて明治30年官営八幡製鉄所(現新日鉄)の建設のため農商務省より製鉄技術習得の目的で他の5名とともにドイツに派遣されていた。

当時ヨーロッパは産業革命後の隆盛期で、製鉄から車輛、武器などをつくる鑄鋼の時代に入っていた。1889年パリ万国博覧会におけるエッフェル塔はまさに鉄の建造物の象徴であり、1900年のパリ万国博覧会にはじめて地下鉄が開通した。

このような状況を見た両名は与えられた製鉄用ロール技術の研究テーマを放棄し、専ら鑄鋼技術研究に従事することを誓い合ってグーテホフスング製鉄所の鑄鋼の現場に入り、これを実行した。

2年間安下宿でジャガイモを食べながら貯めた金でできるだけ機械を買い集めて上記の船に積み込んだのである。帰国後命に反して鑄鋼の研究をした事情を述べ、農商務大臣に引き続き鑄鋼の試験に従事したい旨嘆願したが入れられず、両名とも休職を命じられた。

背水の陣を敷いた彼等を支援したのが蔵前の恩師平賀義美先生(当時大阪商品陳列所長・住友家嘱託)で、氏の斡旋により河上謹一(住友理事)、片岡尚輝、浅村三郎(明19, 第1回機械工芸学部卒業、我が国最初の特許事務所創設者、現浅村内外特許事務所)らから3万円余の出資を得、日本鑄鋼所が大阪府伝法村に設立された(明32・9月, 1899)。

片岡所長、山崎技師長、羽室技師ら職員8名、工員24名は小型シーメンス式平炉(3t半)、ドーソン式ガス発生炉各1基を備えた工場を建設し、翌33

年3月点火試験を行った。我が国最初の民間平炉である(写真)*。工場建設、試運転などは徹夜の連続でその苦勞は筆舌につくし難いものであったと聞く。

紙面の都合で詳細は省略するが、技術未熟のため所期の製品が容易に出来ず、会社は巨額の損失を出し、そのうえ折からの金融恐慌の影響を蒙り住友家に営業を譲渡することになった(明34・6月)。住友家はこれより先明治21年別子銅山に製錬所、同30年大阪伸銅所をつくり、製鉄事業への関心も深く、住友鑄鋼所として上記事業を引き継いだ。山崎工場長ら職員20名、工員160名とともに新会社に移り、以後設備を拡張し明治35年末に平炉2基、年産2,000tの製鋼、日産6tの鑄造能力をもつようになった。日露戦争(明37~38)のはじまる直前のことである。のち同所は昭和10年伸銅所と合併し住友金属工業㈱となる。

明治時代蔵前の学生はその意気軒昂「本郷(東大)何するものぞ」と東京の町を闊歩していた。上記両名の一步でも速く欧米先進国に追い付くために自己の生活も犠牲にするのみならず、場合によっては上司の命に従わず、そして認められなければ独立して事業をおこすなど、まさに蔵前精神躍如たるものがある。また真摯な事業欲に恩師、同窓の強力な援助があつて成功したのである。

折しも本学は本年5月に創立120周年を迎えたが、本文が日本の高度工業社会への発展へ貢献された多くの蔵前OBを思い起こすよすがとなれば幸いである。

参考文献：日本鑄鋼所創業史、住友金属工業㈱60周年小史、日本近代製鉄技術発達史、浅村内外特許事務所資料。

*註 これまでも陸海軍の造兵廠などで外国技術も導入し試みられていたがすべて失敗に終わっていた。写真は住友金属工業60周年小史より転載。



我が国最初の鑄鋼用民間平炉(大阪府伝法村)